

獺祭忌ダツサイキ

中村 龍介

九月十九日は俳人・正岡子規の命日である。子規は明治三十五年の今日、三十五歳で亡くなった。

あまり知られていないが、若い頃、子規は大の野球ファン。選手としても活躍した。また、野球用語の日本語化にも貢献したといわれる。「バッター」「ランナー」「フォアボール」「ストリート」といった外来語に「打者」「走者」「四球」「直球」という訳語をつけたのも子規だ。

が、二十八歳の時に咯血して野球から足を洗い、療養生活に入る。療養中の子規は大変な読書家であった。そして、彼の読書は少し変わっていた。

一冊の本を最後まで読むことはしない。少し読んでは、頁を開いたまま、自分の周りに並べていく。いつの間にか、何冊もの読みかけの本がぐるりと彼の寢床をとり囲むようになっていた。

似たような行動をとる動物がいる。カワウソ 獺である。カワウソの獺は変わって

いて、獲った魚を直ぐに食べてしまうことはしない。少し食べては傍に置き、次の魚を獲りに行く。やがて、捕まえた獲物の魚が岸边にズラリと並ぶことになる。その様子は、まるで、カワウソが魚を神に捧げてお祭りをしている

ようにみえることから、「獺祭ダツサイ」という言葉が生まれた。

晩年の子規は自分のことを好んで「獺祭書屋主人」と呼んでいた。そして、「獺祭書屋俳話」という単行本も出している。

子規の没後、彼の命日を表すのに「獺祭忌」という言葉ができ、秋の季語として使われるようになった。

獺祭忌 明治は遠く なりにけり

大正の末期、志賀芥子シガカイシという少年が地方の新聞に投稿したとされる句だ。

新聞少年だった志賀芥子が尊敬する正岡子規を偲んで詠んだものと言われる。一年後、明らかにこの句を真似たような作品が世に出る。

降る雪や 明治は遠く なりにけり

こちらは、昭和初期には俳句界の大御所になった中村草田男の句だ。彼が、東大生の時、普通だった青山小学校を訪れて、雪の降る校庭で詠んだという。

この句が発表された時、季語である「獺祭忌」を「降る雪や」に替えたただけの草田男の句は、剽切ではないかという議論がかなりあったようだ。が、「無名の新聞少年」対「俳句界の重鎮」という構図では、結論は見えている。単に子規の命日に子規を偲んだというだけの句に対して、草田男の作品は奥の深い秀作だという理由でお咎め無しとなった。

大阪のMBS（毎日放送）が制作、毎週木曜日の夜、TBSでも配信する「プレバト」というバラエティ番組がある。芸能人が作る俳句を夏井いつきという俳人が批評する番組。夏井の毒はあるが悪意のない、ボロクソ批評が面白く、人気番組になっている。

もし出来ることなら、「毒舌先生」の異名をとる夏井いつき先生に草田男の「降る雪や」の評価をお願いしたい。大先輩、草田男の句を歯に衣着せぬ調子でこき下ろしてくれるのではないだろうかと期待している。そうすれば、無名の志賀芥子の存在を世間が少しは認識してくれるだろう。

余談だが、清酒の世界で近年、急速に人気を博してきた吟醸酒に「獺祭」という銘柄がある。この名前の由来は、蔵元の旭酒造本社の所在地から来ている。「山口県岩国市周東町（しゅうとうまち）獺越（おそごえ）」

獺越の由来は、その昔、隣村に住む古い獺が子どもを化かしてこの村まで追い越してきたとする伝承から来るとされる。また、「獺」が正岡子規の屋号「獺祭書屋主人」に使われていることも意識していたようだ。

普通なら読めない「獺祭」という難しい字をお酒好きの人は難なく読むが、その意味を問うとほとんどの人は答えられない。左党の人たちが獺祭についてもう少し勉強してくれれば、志賀芥子の名前が浮かび上がるチャンスにもなるのだが……。

余談ついでに、無名の大学浪人生が作ったとされる戯れ句を一句。

早稲田落ち 明治も遠く なりにけり

【二〇一九年九月十九日 原稿用紙五・五枚 課題「毒」】

